

旧東ドイツにおけるエリートハンドボールコーチ養成のカリキュラム

會 田 宏

(武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻)

Zum Lehrprogramm für die Ausbildung zu den Elitenhandballtrainern in der ehemaligen DDR

Hiroshi Aida

Abteilung der Sportwissenschaft, Philosophische Fakultät

Mukogawa Frauen Universität, Nishinomiya 663, Japan

Zusammenfassung

Der Zweck dieser Untersuchung liegt darin, das Lehrprogramm für die Ausbildung zu den Elitentrainern in der ehemaligen DDR Klarzumachen. Hierzu wurden vor allem die Lehrhefte und Studienanleitungen der Spezialausbildung vom Handball zum Lehrgebiet Theorie und Methodik des Trainings der Sportarten an der Deutsche Hochschule für Körperkultur (DHfK) dokumentiert und die folgenden Aspekte werden behandelt :

- Die Spezialausbildung war Bestandteil des Gesamtprozesses der Ausbildung zu den Eliten-trainern an der DHfK und ihrer Inhalt wurde aufgrund der Trainingslehre praktisch-theoretisch systematisiert.
- Mit dem Lehrprogramm wurden die Studierenden politisch-ideologisch und fachwissen-schaftlich so vorbereitet, daß sie ausgehend von den gesellschaftlichen Erfordernissen, sowohl als Trainer, als Funktionär oder Wissenschaftskader eingesetzt werden können.

はじめに

今日、オリンピックを頂点とする国際的な競技スポーツはめざましく発展している。現在までの発展を大きく支えたのは、かつての東欧社会主義諸国におけるエリートスポーツ選手であった。彼らは国家によって社会的・職業的に高い地位を認められたステータスマンとして、オリンピックや世界選手権などの大会を制覇してきた。なかでも特に注目されたのは、旧東ドイツ(以下、煩雑さを防ぐために東ドイツと略)の活躍であった。東ドイツは、戦後国土を分断され、きびしい旧ソ連の支配体制下にあったために、独立国家としての存在を世界にアピールし、国民の自信と誇りを獲得することをねらいとして、「スポーツにおける世界制覇」を主要な国家政策の1つとして推し進めた¹²⁾。

北海道とほぼ同じ面積で、人口わずか1700万人という小さな国である東ドイツにおいて、スポーツ政策が成功した要因には、タレントの発掘および養成、スポーツトレーニングに関する研究の体系化に加えて、スポーツコーチ(以下コーチと略)の社会的・職業的地位の確立とコーチ養成システムの制度化が見逃せない。コーチの養成には、コーチングレベルに応じて多様なコースが準備されていた。なかでも、その最高機関として、数多くのエリートコーチを輩出してきたのは、DHfK(Deutsche Hochschule für Körperkultur, ドイツ体育大学)¹³⁾であった。この大学では、体育教員の養成ではなく、コーチとして充分な一般的・専門的な理論および実践的能力の養成が行われていた。このことは、DHfKにおけるカリキュラム内容が、東ドイツのエリートコーチとして身につけなければならない知識および技能そのものであったことを意味している。

筆者は、東西ドイツ統一直後、DHfKを訪れる機会を得た。そこで、ハンドボールの主任であったSchlegel教授の協力を得て、DHfKにおけるハンドボールの授業プログラム⁴⁻⁸⁾、東ドイツハンドボール協会のトレ

ニングプログラム^{9,10)}など、これまで未公開の貴重な資料を収集し、DHfKの教育プログラムなどについて説明を受けることができた。東ドイツのハンドボールは、強化スポーツ種目の1つであり、科学的に基礎づけられたトレーニングシステムと競技システムによって発展した¹³⁾。国際的には、男女ともオリンピックや世界選手権を制覇するなど、大きな成果をあげた。また、国内的には、学校体育、スポーツクラブ活動、スバルタキアード^(註2)などにおいて好まれて行われている伝統的なスポーツ種目の1つであった¹³⁾。したがって、今回収集した資料は、これまで秘密のベールに隠されていた東ドイツのエリートスポーツシステムの一部を明らかにするものであり、ベルリンの壁が崩壊し、国策によって保護されてきた東ドイツのスポーツ政策が破綻したことによって、はじめて私たちの目の前に現れたものである。その内容は、イデオロギーや国家体制などが異なっていたとしても、競技力向上のための普遍的な知識であると考えられる。したがって、本格的な競技スポーツの実践と研究の両面でのフルタイムの専門者を欠いてきたわが国にとっては¹⁴⁾、特に重要な知見になることはまちがいない。

そこで本論では、DHfKにおいて収集した資料およびSchlegel教授との議論をもとにして、東ドイツにおけるエリートハンドボールコーチ養成のカリキュラムの概要について明らかにし、わが国において、スポーツ・トレーニング理論に基づいた組織的・体系的なコーチングを確立するための資料を提供することを目的としている。

DHfKにおけるハンドボールの授業

DHfKでは、「スポーツ教育学」・「スポーツ心理学」・「スポーツ政策」などの人文科学系科目、「サイバネティクス」・「スポーツ医学」・「バイオメカニクス」などの自然科学系科目、さまざまなスポーツ種目におけるトレーニング理論と方法に関する科目、「社会主義体育管理」・「マルクス・レーニン主義」などのイデオロギー科目、および外国語などが開設されていた²⁾。ハンドボールの授業には、1ゼメスターで修了する「ハンドボール基礎養成」⁶⁾と8ゼメスター(4年間)にわたって行われる「ハンドボール専門養成」⁴⁾があった。この2つは、いずれも「スポーツにおけるトレーニング理論と方法」の領域における授業として開設されていたが、授業開設のねらいや授業内容が異なっていた。

基礎養成は、14時間の講義およびゼミナールと28時間の実技で構成され、さまざまなスポーツ種目を専門とする学生が履修していた。授業のねらいは、「ハンドボールのトレーニング手段を、それぞれの学生が専門とするスポーツ種目の一般的なトレーニング手段として応用する能力を習得すること」⁶⁾であった。東ドイツにおける、スポーツクラブおよびスポーツ学校^(註3)などの指導現場では、早い時期に1つの種目に専門化させることはなく、さまざまなスポーツ種目を体験させ、選手の素質を見きわめた上で専門化させていくという方法をとっていた²⁾。このことから、基礎養成では、専門種目を越えた全面的なスポーツ能力を開発させる方法を身につせさせると同時に、さまざまなスポーツ種目の持つ共通性および専門性を認識させることもねらいとされていたと考えられる。そこには、「特定のスポーツ種目だけに限られた知識や技能しか持たない者は、優秀な指導者にならない。」²⁾という東ドイツにおけるコーチ養成の基本的な考え方が現れている。具体的な教授内容としては、①基礎技術および戦術行為を習得させる方法論やデモンストレーションする能力、②自己の技術・戦術的な能力、③ボールゲームの持つ教育的特性を自覚的に活用し、選手の人格を発達させる能力、④大会を組織・運営し、レフェリーとしてゲームを管理する能力などを身につけるテーマが選択されていた⁶⁾。

一方、専門養成は、DHfKの教育カリキュラムのメインであった。ここでの主なねらいは、「ハンドボールのコーチ、協会委員、あるいは科学者として国家の発展に貢献できる専門的な能力を養成すること」であった⁴⁾。基礎養成に比べて、より実践的な内容が、かなり豊富に取り扱われており、まさにエリートコーチへの登竜門であった。本論では、この「ハンドボール専門養成」における教授プログラム⁴⁾をもとにして、エリートコーチ養成のカリキュラムを明らかにする。

エリートコーチ養成のプログラム

表1に「ハンドボール専門養成」における教授テーマとその時間割当を示した。

「ハンドボール専門養成」は、36時間の講義、114時間のゼミナール、206時間の実技で構成されていた。講義およびゼミナールは第5ゼメスター(3年生の前期)以降に、実技は第1ゼメスター(1年生の前期)から第8ゼメスター(4年生の後期)にわたって開講された。また、この専門養成と並行して、350時間のトレーニングおよ

Tabelle 1. Themen und Umfang der Lehrveranstaltungen, Spezialausbildung

テ ー マ	講義	ゼミナール	実技
1. ハンドボールの社会的視座, 専門体系と組織構造	4	18	—
2. 競技力水準と競技力予測	2	6	—
3. トレーニングおよび競技過程の基礎と構造	4	8	—
4. トレーニング過程における体力の発達	4	10	36
5. 技術および個人戦術の養成とコーディネーションの能力の発達	6	24	66
6. 集団戦術の養成	10	30	84
7. 人格の形成と心理的な競技適性の形成に対する専門的な貢献	—	2	—
8. トレーニングおよび競技過程の計画, 管理, 組織	4	10	—
9. トレーニングおよび競技過程のコントロールと調整	2	4	20
10. トレーニングおよび競技過程のための用具条件	—	2	—
合計時間数	36	114	206

1) 文献4より訳出

び 842 時間の指導実習が行われていた。このことは、DHfK では、自己の技術・戦術的な能力および体力、指導実践能力の向上も要求されており、総合的なハンドボールコーチの養成が目指されていたことを意味している。

本論では、エリートコーチ養成のプログラム内容について、(1)ハンドボールの社会的立場と組織、(2)技術・戦術的、体力的、心理的な競技力の養成、(3)トレーニングおよび競技過程の計画・実践の3つの観点から検討する。

(1) ハンドボールの社会的立場と組織に関連して

表2に、ハンドボールの社会的立場と組織に関連したテーマの教授内容を示した。

「ハンドボールの社会的視座、専門体系と組織構造(テーマ1)」は、講義およびゼミナールの時間数が3番目に多い。主な内容は、ハンドボールの起源と発生、ドイツ国内および国際レベルでの普及過程と今後の発展傾向など、ハンドボールの歴史的発達であり、これらはゼミナール形式で議論されていた。また、東ドイツハンドボール協会および国際ハンドボール連盟の組織と課題について言及し、東ドイツ体育スポーツ連盟および国際ハンドボール連盟のかかえる課題を解決するために、東ドイツハンドボール協会がどのような役割を果たさなければな

Tabelle 2. Schwerpunkte von Thema 1, Gesellschaftliche Aspekte, Fachsystematik und Organisationsstruktur

1. ハンドボールの社会的視座, 専門体系と組織構造
(1) 社会主義国家における体育およびボールゲームの体系, 立場と機能
(2) 歴史的発達
(3) 東ドイツハンドボール協会の組織と主要課題
(4) 国際ハンドボール連盟の組織と主要課題
(5) 国際競技規則
(6) 東ドイツハンドボール協会における大会規定

1) 文献4より訳出

らないのかといった問題などについて議論される機会も多く設けられていた。さらに、ハンドボールに内在している教育の可能性を利用して、社会主義国家に必要な人間を形成する能力を身につけることも要求されていた。これらのことは、DHfKでは、単に技術および戦術を教授したり、所属チームの勝敗に関わるコーチを養成するというのではなく、国内および国際的に、ハンドボールの発展に寄与できる人材を育成する教育が行われていたことを示唆している。

(2) 技術・戦術的、体的および心理的な競技力の養成に関連して

表3に、技術・戦術的、体的および心理的な競技力の養成に関連したテーマの教授内容を示した。

「技術および個人戦術の養成とコーディネーションの能力の発達(テーマ5)」と「集団戦術の養成(テーマ6)」は、講義、ゼミナールおよび実技の時間数の多さからみても教授内容の中核である。ここでは、ハンドボールゲームの本質である技術および戦術とその指導法が教授されていた。

ボールゲームにおける技術および戦術は、動作の習熟過程に見られるような発生、洗練、定着といった学習の段階性と同じく、うまくくなっていくのに必ず通り抜けなければならない諸位相が浮き彫りにされる。したがって、技術・戦術の養成では、習熟段階に応じて適切なトレーニング手段を選択しなければならない。技術・戦術に関するDHfKの具体的な教授内容には、基礎技術をデモンストレーションしたり、運動経過の誤りを認識し修正する手段と方法なども含まれており、技術・戦術を方法的に正しく習得させる能力が養成されていた。個人の技術・戦術力を把握・評価する手段と方法では、ボールゲームにおけるコントロールテストのあり方とその利用について言及され、トレーニングおよびゲーム場面における評価の形態と基準が示されていた。また、チームの攻撃戦術および攻撃システムでは、さまざまな攻撃システムの発生と発達、ポジションの配置とプレー方法の発達、攻撃の局面構造、最新の攻撃戦術と発達傾向などについて具体例をあげながら実践された。このように、技術・戦術に関するDHfKの教授内容は、ゲームを構成するそれぞれの行為、すなわち、個人の技術・戦術、グループ戦術およびチーム戦術などに分けて示されており、コーチングの現場において指導者が出会う問題点のほとんどを網羅していると考えられる。

また、それぞれの技術・戦術的な行為は、以下に示すような指導体系で教授されていた。

- 技術や戦術行為などの構造および体系
- 習熟段階を高めていくための手段と方法
- 技術・戦術的な達成力を把握・評価する手段と方法
- 技術・戦術トレーニングをトレーニングサイクルへ組み入れる手段と方法

技術・戦術に関するこのような体系的なとらえ方は、トレーニング目標の構造的把握、トレーニング手段・方法の選択、トレーニング計画の立案、トレーニング効果の判定といった一連のトレーニングコントロールの手法に準じていると考えられる。また、それぞれの教授内容は、常に長期的な競技力養成、年齢段階、性差が考慮されており、対象に応じた指導理論が習得できる。これらのことは、DHfKのコーチ養成が、まさに、体系的かつ実践的なプログラムに基づいて行われていたことを示すものである。

「ハンドボール競技者の体力の発達(テーマ4)」に関しては、技術・戦術の養成と同じく、体系的なプログラム内容が用意されていた。ここでは、まず、男子・女子、年齢段階および各競技レベルにおいてハンドボール競技者に要求される体力のタイプとレベルについて示されていた。また、体力養成のトレーニング手段・方法・プログラム、体力の把握と評価、体力トレーニングの期分けと周期化なども議論され、具体的な方法が実習されていた。

「人格の形成と心理的な競技適性の形成に対する専門的な貢献(テーマ7)」では、心理的な競技適性が取り上げられて議論された。これは、2回のゼミナールだけで構成されていたが、ここでも長期的な競技力養成、年齢段階、性差などが考慮されている。これらの体力の発達および心理的な競技適性は、ハンドボール競技者としての前提条件であり、スポーツ医学やスポーツ心理学などの研究領域において明らかにされた一般的な知見を、ハンドボールに専門的な知識として深めていくことがねらいとされていると考えられる。

Tabelle 3. Schwerpunkte von Thema 4, 5, 6 und 7, Technische und taktische Ausbildung und Entwicklung konditioneller, koordinativer und psychischer Fähigkeiten

-
4. トレーニング過程における体力の発達
 - (1) 男子・女子のさまざまな年齢段階および競技レベルにおいて要求される体力の発達
 - (2) 体力の養成のためのトレーニング手段, 方法およびプログラム
 - (3) 体力の把握と評価
 - (4) 体力トレーニングの期分けと周期化
 - (5) 長期的な競技力養成における年齢と性別の特殊性
 5. 技術および個人戦術の養成とコーディネーションの能力の発達
 - (1) 専門的なコーディネーションの能力
 - (2) 攻撃および防御における個人の技術・戦術
 - (3) 攻撃, 防御, ゴールキーピングにおける技術の習熟と戦術力を発達させるトレーニング手段と方法
 - (4) 個人の技術・戦術力を把握・評価する手段と方法
 - (5) 個人の技術・戦術トレーニングの期分けと周期化
 - (6) 長期的な競技力養成における年齢と性別の特殊性
 6. 集団戦術の養成
 - (1) グループ戦術の体系と原則
 - (2) 攻撃におけるグループ戦術
 - (3) 防御におけるグループ戦術
 - (4) グループ戦術的なゲーム要素を発達させるためのトレーニング手段と方法
 - (5) グループ戦術的な行為をトレーニングおよびゲームにおいて把握・評価する手段と方法
 - (6) グループ戦術におけるトレーニングの期分けと周期化
 - (7) 長期的な競技力養成における年齢と性別の特殊性
 - (8) チーム戦術の体系と原則
 - (9) チームの攻撃戦術と攻撃システム
 - (10) チームの防御戦術と防御システム
 - (11) チーム戦術的なゲーム要素を発達させるためのトレーニング手段と方法
 - (12) チーム戦術的な行為を把握・評価する手段と方法
 - (13) チーム戦術におけるトレーニングの期分けと周期化
 - (14) 長期的な競技力養成における年齢と性別の特殊性
 7. 人格の形成と心理的な競技適性の形成に対する専門的な貢献
 - (1) 味方, 相手およびレフリーに対するプレーヤーの態度
 - (2) 競技力に影響を及ぼす心理的な競技適性
 - (3) キャプテンの役割とチームの活動
 - (4) 長期的な競技力養成における年齢と性別の特殊性
-

1) 文献4より訳出

(3) トレーニングおよび競技過程の計画・実践に関して

表4に、トレーニングおよび競技過程の計画・実践に関連したテーマの教授内容を示した。

「競技力水準と競技力予測(テーマ2)」では、国内および国外のトップレベルの大会を対象として、競技力の分析・評価の手段と方法が習得された。また、さまざまな年齢段階の男子・女子において競技力を決定づける要因を明らかにして、その水準と発達などについて議論された。この結果は、トレーニングおよび競技過程における目標設定に影響を及ぼすものである。

トレーニングおよび競技過程に関するテーマで取り扱っている内容は、スポーツトレーニング理論に依拠しており、ハンドボール競技者のトレーニングを展開するための基礎を築くものである。

「トレーニングおよび競技過程の基礎と構造(テーマ3)」では、まず、競技力の構造、ゲーム概念の課題と内容、トレーニングの組織体系などについて明らかにされた。ここで最も注目すべきことは、トレーニングの目的、課題、内容、構造に関して、選手のライフサイクル、すなわち、長期にわたる競技力養成の視点から言及されていたことである。たとえば、ユースの段階では、競技適性の判定およびタレントの選抜方法、競技力の評価・診断など、タレントの発掘にとって重要な内容が含まれていた。ジュニアおよびシニアの段階では、トレーニングの割合、競技レベルに応じた競技システムの展開など、タレントの養成に関する内容が含まれていた。また、

Tabelle 4. Schwerpunkte von Thema 2, 3, 8, 9 und 10, Trainings- und Wettkampfprozess

-
2. 競技力水準と競技力予測
 - (1) 男子・女子のさまざまな年齢段階において競技力を決定づける要因の発達と水準
 - (2) 発達傾向
 3. トレーニングおよび競技過程の基礎と構造
 - (1) 競技力の構造, 個人, グループ, チームの競技力の構造, トレーニング構造との関係
 - (2) 長期的な競技力養成の視点に立ったユース期のトレーニングの目的, 課題, 内容, 構造
 - (3) ジュニア期のトレーニングの目的, 課題, 内容, 構造
 - (4) シニア期のトレーニングの目的, 課題, 内容, 構造
 - (5) トップアスリートのトレーニングの目的, 課題, 内容, 構造
 - (6) ゲーム概念の課題と内容
 - (7) トレーニングの組織体系
 - (8) 研究活動の作業仮説, 手段構成, 結果
 8. トレーニングおよび競技過程の計画, 管理, 組織
 - (1) トレーニングおよび競技過程を計画するための資料の内容および構成とその関係
 - (2) 内容の計画と方法
 - (3) ゲームに対するチームの準備, ゲーム中における実行, ゲーム後の課題, その内容と評価の方法
 - (4) 大会の組織
 9. トレーニングおよび競技過程のコントロールと調整
 - (1) 東ドイツハンドボール協会における強化システム
 - (2) トレーニング水準, 初期の競技力およびトレーニングによる競技力の発達システムの確立
 - (3) トレーニング記述の手段および方法とその評価
 - (4) トレーニングおよび競技過程を客観化する手段と方法
 10. トレーニングおよび競技過程のための用具条件
 - (1) 競技場の作成
 - (2) トレーニングの補助機器の導入
 - (3) トレーニングおよび競技過程における測定・研究装置の導入
-

トップアスリートのトレーニングでは、トレーニング方法学的な基本概念をふまえた上で、期分けと周期化、個性化と細分化、専門化と普遍化などの内容が含まれていた。これらの内容は、年齢段階と競技レベルに応じたトレーニングプログラムを立案する能力を習得させることをねらいとしたものであると考えられる。

「トレーニングおよび競技過程の計画、管理、組織(テーマ8)」では、マクロ、メゾ、ミクロの各トレーニングサイクルにおける目標、内容、方法が教授された。また、トレーニングサイクルの中で、ゲームや大会をどのように組織するかといったより実践的な問題も検討されていた。さらに、「トレーニングおよび競技過程のコントロールと調整(テーマ9)」では、主に、東ドイツハンドボール協会における強化システムについて議論されていた。これらのテーマは、社会主義体制において、ゲームおよびトレーニングを計画、組織、管理するための知識・技能を習得させることをねらいとしたものであると考えられる。

ところで、東ドイツのスポーツでは、研究者と現場との密接なつながりがあった。その1つの例として、トレーニング補助器具の開発があげられる。たとえば、レスリングでは、組み手の力を強化および測定したり、腹ばいの相手を仰向けにひっくり返すトレーニングマシンなどが開発されていた¹⁴⁾。ハンドボールにおけるトレーニングの補助機器の導入については、「トレーニングおよび競技過程のための用具条件(テーマ10)」で検討されていた。このことは、ボールゲームのトレーニングおよび競技過程においても、コーチとスポーツ技術者・研究者が協力し、測定・研究装置が開発・導入されていたという体制を裏づけるものであり、科学的トレーニングの実践への応用が広くすすめられたことを示唆している。

ま と め

1990年の東西ドイツの統一にともない、社会主義国家のイデオロギー、スポーツ政策などによって支えられた東ドイツのエリートスポーツシステムは破綻し、西側の比較的自由的な民間主導権型のスポーツ強化システムへの移行を余儀なくされた。これによって、戦後の国際競技スポーツの理論と実践を、常にリードしたエリートスポーツシステムの発展はもう見られなくなった。エリートコーチ養成の拠点であったDHfKも閉鎖された。しかし、このことは一方で、鉄のカーテンで閉ざされていたスポーツトレーニングの理論と実践が、世界に明らかにされるようになったことを意味している。

本論では、かつてのスポーツ王国「東ドイツ」におけるエリートコーチ養成のカリキュラムの概要について明らかにするために、コーチ養成の拠点であったDHfKのハンドボール基礎および専門養成の教授内容について検討し、スポーツトレーニング理論に基づいた組織的・体系的なコーチングを確立するための資料を提供することを目的とした。

DHfKにおけるハンドボールの授業は、ハンドボールのトレーニング手段を、さまざまなスポーツ種目の一般的なトレーニング手段として応用する能力を身につけさせることをねらいとした「ハンドボール基礎養成」とハンドボールのコーチ、協会委員、あるいは科学者として国家の発展に貢献できる専門的な能力を身につけさせることをねらいとした「ハンドボール専門養成」があった。「ハンドボール専門養成」は、エリートコーチへの登竜門であり、実践的・体系的なコーチ養成プログラムが教授されていた。その具体的な内容は、社会主義体制下におけるハンドボールの立場と組織、技術・戦術的、体力的、心理的な競技力の養成、トレーニングおよび競技過程の計画・実践など、総合的なものであり、質的に高く、量的に充分なものであった。

DHfKにおける、このようなコーチ養成のプログラムは、かつてのスポーツ王国が築き上げた財産である。それは、単に競技力向上の場だけでなく、生涯にわたるスポーツ実践の場においても有用な、普遍的な知識としてとらえることができると考えられる。

注

注1) DHfKは、1950年に東ドイツ第2の都市であるライプツヒに創立された。一学年の定員は約250名(全日制)であり、入学には、さまざまなスポーツ種目を実践できる能力と一定レベル以上の学力が要求されていた²⁾。そのために、学生は必ずしもトップレベルのスポーツ選手でなかった。4年間(8 semester)で全課程を修了し、卒業生のほとんどは専門種目のエリートコーチとして活躍していた。1990年のドイツ統一後は、学生および教職員の数が大幅に削減され、現在はライプツヒ大学の体育学部として存在している。

- 注2) スパルタキアードは、東欧社会主義諸国において行われていた大規模な国内競技会のシステムであった。東ドイツでは、競技によるスポーツ教育の補完と競技力のレベルのチェックをねらいとして、1963年に青少年のスパルタキアードが導入されたが、それはスポーツタレントを発掘する最も重要な手段としても利用されていた³⁾。
- 注3) スポーツ学校は、東ドイツ体育スポーツ連盟の直轄で、全国に9つあった。入学は、10歳から(特定の種目を除く)であり、学業、スポーツとも優秀な児童が選抜されていた。一般の授業の他に、DHfKを卒業したコーチの指導のもとで、毎日3時間のスポーツの授業が行われていた²⁾。

文 献

- 1) 會田 宏, 河村レイ子, スポーツ運動学研究 6, 23-33(1993)
- 2) 浅見俊雄, 体育の科学, 30(4), 277-281(1980)
- 3) パイヤー, E(編)／朝岡正男監訳, スポーツ科学辞典, 大修館書店, 東京, pp.275-276(1993)
- 4) DHfK, *Lehrprogramm für das Lehrgebiet Theorie und Methodik des Trainings der Sportarten-Fußball, Handball, Volleyball, Basketball, Kleine Spiele*-, Leipzig(1981)
- 5) DHfK, *Lehrheft zum Lehrgebiet Theorie und Methodik des Trainings der Sportarten-Handball-Systematik der Technik und Taktik des Handballspiels*, Leipzig(1984)
- 6) DHfK, *Studienanleitung für das Direktstudium zum Lehrgebiet Theorie und Methodik des Trainings der Sportarten-Handball / Grundausbildung*, Leipzig(1988)
- 7) DHfK, *Lehrheft zum Lehrgebiet Theorie und Methodik des Trainings der Sportarten-Fußball, Handball, Volleyball, Basketball, Kleine Spiele / Spezialausbildung-*, *Trainingsmethodische Anleitung für eine akzentuierte Ausbildung von Angriffshandlungen im Aufbautraining Handball*, Leipzig(1988)
- 8) DHfK, *Studienanleitung für das Fachschulfernstudium zum Lehrgebiet Sportspiele*, Leipzig(1989)
- 9) Deutscher Handball-Verband der DDR, *Trainingsprogramm Handball für die Trainingszentren, Trainingsprogramm Grundlagentraining 1985-1989*(1985)
- 10) Deutscher Handball-Verband der DDR, *Ergänzung zum Trainingsprogramm Handball für die Trainingszentren-Methodische Leitlinie Spieltraining-*
- 11) 村木征人, スポーツ・トレーニング理論, ブックハウス・エイチディ, 東京, p.15(1994)
- 12) 同上, p.32(1994)
- 13) Stiehler, G., Konzag, I. und Döbler, H., *Sportspiele*, Sportverlag Berlin, pp.327-328(1988)
- 14) 高橋日出二, トレーニングジャーナル 6月号, ブックハウス・エイチディ, 東京, pp.10-18(1992)